

笹ミキ沢 沢登り山行報告

【山 域】 足尾 庚申山

【日 程】 7月7日（金）夜～8日（土）

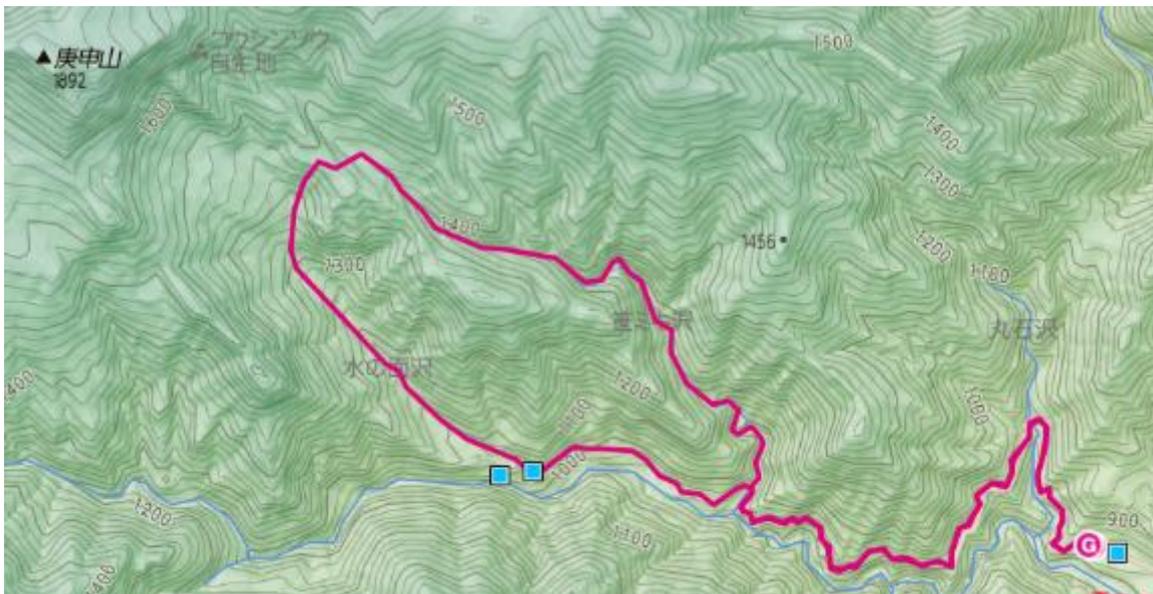
【参加者】 CL 柘植秀樹 SL 澤田路子（報告） 藺田富久美 石井恵子

【行 動】

7月7日（金）神戸駅（わたらせ渓谷鉄道）仮眠

7月8日（土）晴れ

銀山平公園駐車場（林道歩き）5:30 → 笹美木橋（入渓）6:40 → 2段25m滝 7:20
→ 支流の4段45m滝 10:40 → 1450mで右岸尾根へ 12:20 → 中間尾根 12:45
→ 登山道 13:40 → 一の鳥居 15:00 → 16:00 駐車場



昨年計画されていて流れ、リベンジとして前の週に予定した計画も天候で流れての再再リベンジ、足尾笹ミキ沢。前夜発で千葉を出てわたらせ渓谷鉄道の神戸（ごうど）駅で仮眠。レトロで手作り感満載のぬくもりある駅舎は、いつか電車で来たいような駅である。翌早朝にぎやかな鳥のさえずりで目覚め、さくさくと身じまいして車で登山口に向かう。当初予定していた国民宿舎かじか荘は改装工事中だったため少し戻って銀山平公園に駐車し、とりあえずまだ涼しい林道を緑のシャワーを浴びながら気持ちよく入渓点まで歩く。とはいえこの林道は落石の巣のようでいたるところに注意喚起のプレートがぶらさがり、確かに道は大小落ちてきた石がごろごろで荒れが目立つ。いくつかの橋を通過した後、笹美木橋の横から身支度していよいよ入渓。

それなりに水量はあるものの暫くは暗い河原歩き。でも沢というだけで心は浮き立ち、溪流靴を通して伝わる水の冷たさが気持ちよく、この分なら泳ぐのもいけそう！30分ほどで、早々と見事な2段25mの滝が出現、しっかり眺めた後当然のように右岸から踏み跡のある巻道をたどり、落ち口に下りる。そこから沢は狭まり、ゴルジュ風を通過、遡行図上での小滝の連続やナメらしい箇所をいつの間にか過ぎ、ほどなく15mの滝。これも直登は厳しく記録用の撮影のみで右岸を巻くことになるが、意外にトラバースがいやらしく急斜面で足元が不安定。ロープをフィックスして通過するためそれなりに時間をとる。次の6mナメ滝は水流が強く、リーダーが水流をはずして右壁に取り付いてみたが厳しいため、少し戻って左岸のルンゼから念のためロープを出して巻き、懸垂で川床に下りる。



最初の小滝は釜が深いので右岸巻き



最初の大滝 2段25m



2段25m滝 上段の落ち口



明るいゴルジュ帯を進む



2番目の大滝 15m直瀑



ツルンとした感じの6mナメ滝

ここで小休止。陽も高くなり見上げれば木々の間から見えるのは雲ひとつない青空。下界は今日も猛暑だろうに、沢の中はひんやりとし、木々を揺らす風も流れる水音も全身にしみ入って、やっぱり夏は沢に限る！ 特に先週の猛暑のバリエーションハイキング10時間と比べると、暑さに弱い身としては天と地の差によけい満足度が高い。(ちょっと言い過ぎ？リーダーごめんなさい)

この先は奇麗で容易に登れる小滝が続き、しばらく歩くと正面に一筋の直瀑が現れる。大きな深い釜を持ちギョッとする登場の仕方だが、ここは右コーナーに登れることを調査済み。笹ミキ沢の下部は登れない滝が多くて巻きばかりであったが、釜の右側を回り込んでようやく直登することができた、

しばらく歩くと、突然右の支流にかかる4段45mの迫力ある滝が見えてくる。全貌は見えないが落ち口は見上げる程高い。そして7m滝を右岸の水流際を登り、その先の8mと8mトイ状が連続する滝は合わせて右岸を巻く。少し上がるとトラバースする先に下降点と思われるタイガーロープが見えたので、大高巻きせずすんだが、うっかりすると上に上がり過ぎる場合もありそうだ。ここでも念のためロープを出す。



6 m ナメ滝の上はようやく癒し系になる



5 m 直瀑



5 m 直瀑は右コーナーが登れた



枝沢の4段45mの迫力ある滝



次に登場する7 m 滝



ここは左コーナーが登れる



8 m滝とこの上のトイ状8 mはまとめて右岸巻き

その上の6 mナメ滝は右岸を登れる

右から1対1の支流を確認して、最後の余韻を楽しむように小滝やナメ、そしてしばらくゴロ歩きが続いたあと水を補給して右岸の笹原に踏み跡を見つける。途切れるまで楽しんでそこを快適に歩き、ふたたび水涸れのゴロ歩きに戻る。ネットで見た記録を参考に1450m付近から右岸の急斜面をよじ登り、中間尾根を乗越して、GPSや地形図で確認した方向に笹の急斜面を滑りながら下りる。ややトラバース気味に沢地形に入りいっきに登山道を目指して下っていかうという所で、最後に懸垂の必要な涸れ滝が出てきて、ちょっと往生する。久々の空中懸垂を楽しんでしまった。その後平坦地となりいよいよ登山道のおいがぶんぶんしてきて、ひょっこり登山道に出る。



中間尾根からの下降で懸垂

空中懸垂になった涸れ滝

この登山道に出た時の気分は何度味わっても格別で、沢にはまる訳のひとつかも。沢支度を解いて登山道にお店を広げつつろいでいると、ちょうどそんな時間なのか庚申山からハイカーの方が何人も下山してくる。途中これから庚申山荘まで行くという大きいザックを背負ったお父さんと小さい女の子の親子連れともすれ違い、小屋での父娘の様子を想像してほほえましくも懐かしい思いがよみがえる。こちらも、このお山廻りの道々、「夫婦蛙岩」とか泣かせる「鏡岩」（孝子別れ処）などなど眺めたり、いわれを知って「あーだこーだ」と楽しみながらノーマルな登山道を新鮮な気分で真っ赤な一の鳥居までのんびり下り、見慣れた林道を駐車場まで戻る。帰りは途中の水沼駅温泉センターという駅のホームに建てられた温泉で汗を流し、佐野SAで佐野ラーメンを食べて遅めの帰葉となる。ガイド本では紹介がなく、知名度は小さい笹ミキ沢ではあるが、意外と魚影もあったとか。巻きも侮れない滝が多く、久々に何度もロープが出る沢だった。リーダー、メンバーの皆さんお世話様！